

自己最速の147キロ エースが奮起 「復活」13奪三振

二本松工 吉羽あたる投手



足を高く上げるピッチングフォームの吉羽あたる投手。12日、県営あづま

12日、県営あづま球場。一回裏安達東・川俣の攻撃。最初の打者の打席で、二本松工のエース吉羽あたる投手(3年)は自己最速の147キロを投げ込んだ。その後も140キロ台の球を連発。90〜100キロ台の力

ープで緩急もつけ、打者30人から12三振を奪って完封勝ちした。三塁も踏ませないピッチングを橋本紀彦監督(41)は「今までで一番」と評した。

試合は息詰まる投手戦だった。安達東・川俣の佐藤拓真投手(3年)も130キロ台の直球を武器に9回を被安打3。自身も「今までで一番いいピッチングだった」と胸を張る。

佐藤にとって悔やまれるのは一回表。甘く入った直球を先頭の渡辺大聖選手

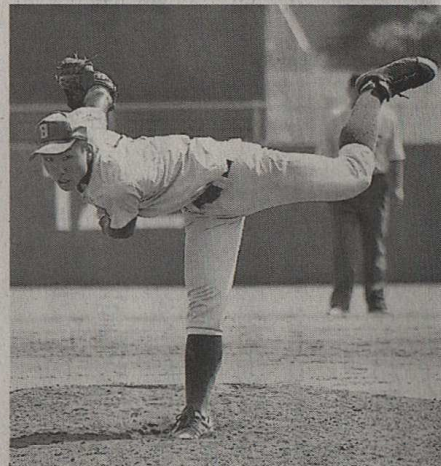
(3年)に二塁打にされた。失策も絡み、2連打で失った1点が決勝点となった。打席でも対戦した両投手。「ナイスボール。プロの球みたいだったよ」。試合後、佐藤は吉羽にその声をかけた。

吉羽の球速は、昨秋から10キロ以上伸びた。練習に取り入れた速投の成果だという。球の回転や制球を意識しながら相手と90キロ離れてライナー性の球を投げ込んだ。体全体を使うよう意識すると「球質が全然変わった」と話す。

「速度は意識せず、ただ全力で投げていた」と吉羽は試合後、話した。「今日は高めに浮いたこともあったので、もう少し制球に気をつけ、全試合ゼロで抑えたい」

(茶井祐輝)

尚志 佐藤輝人投手



9回に力投する佐藤輝人投手=12日、白河グリーン

12日、白河グリーンスタジアム。昨夏の初戦でワールド負けを喫したエースが、今年も再びマウンドに立った。尚志の佐藤輝人投手(3年)。中盤に追いつかれる接戦の中、13奪三振の好投で苦い記憶を乗り越え、完全復活を果たした。

昨夏は2年生ながら背番号1を任せられ、初戦の会津学鳳戦で先発した佐藤。だが自らのエラーに動揺して中盤から制球が乱れ、結果は3-10の7回コールド負け。「自分が先輩たちの夏を終わらせてしまった」。すっかり自信を失い、エースの座からも退いた。

さらに秋の練習で腰を痛め、投球練習ができない状態に。不安と焦りばかりが募ったが、「ここで終わっては先輩たちに申し訳がたない」と奮起し、走り込

みや筋トレなどを地道に続けてきた。3月に投球を再開すると、腰に負担をかけない下半身を生かした投げ方で、徐々に調子を取り戻した佐藤。福地大祐監督も「お前が復活しなきゃ、去年の3年生も納得できないぞ」と発破をかけ、再びエースに起用した。この日の試合も中盤で2-2と、昨夏と同じ状況に。だが佐藤は「同じことは絶対繰り返したくない」と自らを奮い立たせた。カ

ープのキレが尻上がりに増し、6回以降の只見打線を生かして三者凡退に抑えた。スタンドには、「いい姿見せてくれよ」と佐藤にエールを送った去年の3年生も。試合後、佐藤は「約束は果たせたかな、と思う」と小さくほほえんだ。(高橋尚之)